

(田山令史先生最終講義)

カラス・手袋・ビリヤード

田 山 令 史

はじめに

もう三十年前になりますが、佛教大学に就職したとき、仏教研究という厳格な文献学に初めて接し、強い印象を受けました。親しい師弟関係のなか、実証的訓練を経た研究者により、過去の事実や思索が資料の精読とテキスト批判を経て、現代によりがえります。この学問と私が大学で担当する哲学の方法の違いが、ずっと念頭にありました。文献学の堅実さを通じて、哲学の性格を絶えず省みることになったのです。

私が親しんできた哲学、ヒュームやカント、大森莊蔵は、たとえ他の哲学者に言及するとしても、それは自分の議論を始めるきっかけ、あるいは、自分の理論を際立たせる材料であって、場合によっては、我田引水としか言いようがない引用も少なくありません。そして、この態度は必ずしも彼らだけに限られたものでなく、過去の哲学者によく見られます。では、哲学にとって文献学の資料に相当するような、堅固な土台となるものは何なのか、いたい、そのようなものがあるのか。最終講義の場を借りて、哲学という、ともすれば時代や社会から浮き、とりと

めなくも思われる営みの性格を、改めて考えたいと思います。そして、哲学が歴史に組み込まれながら時代を表す、そのありさまをたどってみます。話に具体性を持たせるため、ヒュームたちの議論に少し立ち入ることになります。理屈っぽくなりそうですが、しばらく辛抱していただければ幸いです。

## 一 ヒュームのエディンバラ

この講義に「カラス・手袋・ビリヤード」と、妙な題目をつけましたが、まず、ビリヤードから始めましょう。ときは十八世紀中頃、スコットランドのエディンバラは、ヨーロッパの文化活動を担う都市の一つでした。この「スコットランド啓蒙運動」の中心にいた哲学者、デイヴィッド・ヒューム（一七一―一七七六）は近代哲学を代表する一人で、その議論はカントを刺激して、『純粹理性批判』（一七八一）へのきっかけとなりました。エディンバラには近代の哲学や経済学、そして科学で活躍した人々が集う多くの社交界があり、ヒュームもその常連でした。活気に満ちた会話の中から、たとえば、今日の自由貿易を基礎付ける経済学を始めたアダム・スミス（一七二三―一七九〇）、近代化学の形成期、気体に含まれる二酸化炭素の分離実験を行ったジョセフ・ブラック（一七二八―一七九九）、蒸気機関を本格化して近代工業化の端緒を開いたジェイムズ・ワット（一七三六―一八一九）などが現れます。この集まりは自由で開放的で、食事や酒も楽しめました。そこに、ビリヤード台があったかも知れません。ヒュームが哲学の舞台としたのはビリヤード台でした。ヒュームはここで、哲学史の画期となる議論を展開します。その議論は日常の光景を日常語で語りながら、西洋十八世紀の自然科学や信仰、神学と深く関連し、時代のありさまを浮かび上がらせます。

## 二 ヒュームのビリヤード

ビリヤードは水平な台に置かれたいくつかのボールをキューで突いて、次のボールに当て、その動きによって点数がカウントされていくゲームです。ここで、第一のボールの動きと第二のボールの動きには、原因と結果という関係、因果関係があります。つまり、第二のボールは第一のボールに当てられることによって、動きが決まります。そしてこの、ボールの間の動きが決められるということから、私たちには、第一のボールの動きが第二のボールの動きの原因に見えます。

ところが、この当然と思えることに納得しないのがヒュームです。ヒュームの言うところを、『人間知性研究』（一七四七）の第四章と第七章から聞いてみましょう。

いったい、ここに原因・結果を見るまで、人はどのくらい似たような動きを見ただろうか。第一のボールが第二のボールに続いて動く。はじめてこのような運動を目にする人にとって、ここで見て取られるのは、一方が他方に続く (follow)、つまり、次という形で、一つのボールにもなつて、もう一つのボールが動くことだけではないか。原因と結果の関係は見えてこない。なぜならここで、ボールのどこをとつても、二つのボールの動きをつなぎ、それを因果関係で結合するはずの「力」は見えていないからである。

これは私の哲学の基本だが、人はまず、経験から学ぶのである。天然の磁石が引力を持つとか、牛乳は人には栄養になるとか、このようなことを人は最初から知っているわけがない。自然のあり方や法則、その一切は、例外なく経験だけから知ることができるのである。数学の確かさは、世界のできごとや人の経験にもなつて変化するこ

ともなく、不変である。しかし、数学は自然科学の助けとなるにしても、法則の発見には至らない。自然の法則は事実の問題であり、それを見いだすには経験をもたねばならない。

私はこのような考え方を、英国の先輩、ベーコンやロック、バークリーから学び育てたのだが、一般的に私たちは、何かをまず感覚する、知覚すること、それをもとに、その何かについて考えることができる。言い換えれば、何かの「観念、idea」ができる前に、その何かについての直接的な「印象、impression」「心持ち、sentiment」が行するはずで、観念は、言ってみれば、印象の写し (copy) である。だから、「力」や「エネルギー」「必然的結合」などといった観念ほど不明瞭、不確実なものはない。物体のどこにもその姿を見せない「力」なるものは印象を欠き、力そのものについて観念、考えも生じようがない。すると、ぶつかり合う二つのボールというできごとを、初めて見る、ただ一回しか見ない、そういう人にとって、ボールの間に因果関係は存在しないはずである。

しかし、一回きりの経験ではこの関係は見えてこないが、第一のボールと第二のボールの間の動きが似ている、つまり斉一 (uniform) であるような事例が重なっていくことによって、いつもこうして動きが類似することを予期し、信じるように導かれる。言い換えれば、経験を重ね、ここに同種の動きどうしの結合を習慣的に感じる (feel) とき、先のボール (の動き) が原因とされ、後に続くボール (の動き) が結果となる。

だから、第二のボールが今までとまったく異なる動きをすることも、想像できる。たとえば、今まではずっと、第一のボールの当たり方に対して右に曲がっていたのが、今回は左に曲がることも、想像できる。あるいは、このボールが垂直に上がることで、後退することも想像できる。想像できるなら、可能である。すると、このように、同一の原因に対して、いくらでも異なる結果が可能というのなら、因果関係は、人が、二つのボールの動きの間に思う、あるいは、感じるのであって、ボールの動き自体に備わった、客観的關係ではない。私たちは今までと類似

の結果が生じるだろうことを、ただ、将来にも期待するだけだ。

ところで、「こうなれば、その結果こうなる」という原因・結果の知識だけが、人の将来に向けての行動を可能にする。自然科学も因果性の考え方ではじめて、未来を知り制御することが可能となる。しかし、因果関係は客観性を欠いており、ここに、未来を開くべき知性の驚くべき無知と弱さが現れている。

### 三 斉一性のひろがり

こうしてヒュームは、できごとに必然的な因果関係を見るのは、実際のところ、「未来は過去に似る」という仮定あつてのことと考えます。ここから、因果性の基礎に、この根底的な前提、すなわち、「斉一性（せいいつせい、uniformity）」が見えてきます。

私たちの経験する世界では、あらゆるものごとに類似性や均質性が見られ、類似のできごとが過去から未来にわたつて、間断なく繰り返し続きます。斉一性とは、世界に、このような意味での不変性が成り立っていることをいいます。ここでは、どんな物も、それに似た物が無数にあり、どんなできごと、それに似たできごとが無数にあつて、できごとの連なる連なり方、すなわち変化のありさまも似ます。そして、この変化のありさまから法則と呼ばれる一定の形が見えてきて、それは不変と思われまふ。ときに天変地異と呼ばれる大変化が生じますが、天地の変異であつて、天地の断絶、つまり、消滅や出現ではありません。

ヒュームは、斉一性が現に世界に備わっているだけでなく、この斉一性は人に「普遍的に認められている（universally acknowledged）」ことを強調します（『人間知性研究』、第八章）。さらに、斉一性の思想に、その客観性の根拠付

けや正当化を拒みます（同書、第四章）。このとき、正当化は循環におちいるからです。

試しに、正当化してみましよう。たとえば、「今まで斉一性の考えで、人間は地球上でうまく生き延びてきた。だから、これからも斉一性を仮定してうまく生きていけるだろう」。しかし、これが空回りであることは明らかです。「今までこうだった、だから、これからもこうだろう」とは、そのまま斉一性の表現になってしまっています。しかしどうしても、このような循環は斉一性思想の根拠付けや正当化から外せません。こうしてヒューム以降、斉一性の、言いかえれば、帰納法の正当化は、ずっと問題になってきました。たとえば数学では、ヤコブ・ベルヌーイ（一六五四—一七〇五）の法則（大数の弱法則）を用いたり、現代の確率論に訴えたりして、このヒューム問題を解消しようとする試みもありましたが、うまくいきません。

ところで、世界の斉一性、つまり、私たちの暮らしを見慣れた物事のなだらかな連なりが覆うこと、この親しさを中斷してから、斉一性を新たに現わしてみせる、鮮やかな楽しみがあります。手品です。帽子から鳩が出てきたり、花瓶がバラの花になったり、人が腹から真二つになったり、「予想外」の連続です。ということとは、ここに予想があるということです。予想が裏切られるから、驚き、おもしろいのです。帽子はずつと帽子で、花瓶はずつと花瓶で、人は急に二つにちぎれない、このような、はつきりとは意識していない予想、暗黙の期待が、斉一性の思想に基づき私たちの生活です。手品によって、私たちは自分の思想を驚きながら感じて、この自覚が笑いとなります。

よく短い外国旅行の後、訪れた国のことが話題になります。「アメリカ人は陽気だ」「中国は乾燥している」など。ところで、旅行者はその国のどれだけの人と話し、どこを訪れたのでしょうか。私たちはともすれば、ごく少数の人や場所から、その人たちの国全体の地理風俗を語りがちです。時間的・空間的に限られた経験に見られる斉一性は、狭い範囲をはるかに超えて拡大していきます。そして、今のこの生活の心持ちではるか昔の歴史を考え、地球

という宇宙の片隅で考えついた時空の構造を、宇宙全体へ物理数学的に拡大していく。旅の思い出話にも、この斉一性の世界観が現れています。

なぜ、私たちは斉一性の正当性を気にかけることもなく、旅を語り過去を思い宇宙を考えるのか。これは、改めて考えてみると不思議ですが、誰も氣にとめません。斉一性は経験から得られる知識や信念ではなく、むしろ経験を可能にする前提です。それは、私たちの日常がその上に成り立っている基盤であるからこそ、意識に上らないのです。

#### 四 特殊相対論へ

西洋哲学の歴史は自然科学とともに展開してきました。その科学は十七世紀に入っても、神が主宰する世界を念頭に置く傾向が見られます。ヒュームが心配する、感性に基礎を置く人の理性の無力さは、感性と理性は神のもとで一つ、との確信で覆われがちでした。理性の粹である数学の技法、たとえば微分積分は、曲線の無限分割という抽象的な基礎を持ちます。にもかかわらず、この現実の空間に適用できる。なぜなら、神の創作によるこの空間では感性の対象である物と観念的な思考が一致を見るからだ。そして、自然秩序の斉一性は神の本性からくるものとして、経験に先立って知られている。しかし、このような、ライブニッツ（一六四六―一七一六）に典型的に見られる信仰は、現象の計量的記述に徹する新しい自然科学とともに変わっていきます。この新たなニュートン力学そのものにも、明示されていない斉一性の前提を再検討する科学者も出てきました。このような時代の動きのなかで、ヒュームには見慣れたビリヤードボールの動きが別様に見えてきたのです。

ニュートンの前提は、絶対空間・絶対時間です。宇宙全体を容れる均質なただ一つの空間があり、宇宙を貫いて均質に流れるただ一つの時間がある。このような空間時間の均質性は、斉一性と言い換えられます。ここでもし時空も、ヒュームの言うように、人の経験以外に根拠を持たない前提ならば、科学の進展により、その絶対性をいつか失うかも知れません。じつさい、ニュートンの絶対時間は二十世紀初頭に絶対でなくなりました。一九〇五年の「特殊相対性理論」では、互いに等速直線運動をする座標系の間で、時計の進み方は異なります。このようにして、ニュートンの時間・空間の斉一性は人が世界を見るときに前提でしたが、唯一の客観的事実ではないことが示されました。

ニュートンは実証的、帰納的に、自然現象の計量的記述に徹する道を、近代に向けて開きました。ヒュームにもこの帰納の姿勢が見られます。しかし、その止むことのない問いは実証の限界を超え、帰納そのものに正当化を拒むことになりました。

## 五 「神」という言葉

『人間知性研究』の主題は斉一性かという点、そうではありません。それは宗教・信仰という主題に登るための、はしごです。ヒュームは『自然宗教についての対話』（一七七九）などの著作によって、宗教学・宗教史に関する先駆者の一人でした。なぜ、因果性・斉一性が宗教に関わるのでしょうか。

『創世記』の冒頭で、神による世界の創造が語られます。『創世記』はアウグスティヌス『創世記注解』（五世紀初め）をはじめとして、昔からさまざまに読み込まれてきました。ヒュームは読むのではなく、神は原因で世界は神の結果という表現そのものに向かいます。『人間知性研究』第十一章後半の議論、難解ですが、言葉を補いながら次の



ように要約してみます。

生き物を含めた天地創造は「一なる神」による、ただ一回きりのできごとである。しかし、「唯一」「ただ一回きりの」、こういう言葉を文字通りに解して、あるできごとについて、人は語ることができるのだろうか。人の世界では、どんなものも、それに似たものが無数にあり、どんなできごとでも、それに似た無数のできごとが連なっている。しかし、比類ない神の、唯一の行為である世界創造には、「類似した現象」や「似たようなもの」「繰り返し」など、人間世界のできごととしるしとなる齊一性は、登場の余地がない。

海岸の砂上に片足だけの足跡を見つけたとする。この足跡から、これが人の歩いた跡であること、もう一方の足跡は海水など、何かの作用で消えてしまったことなど、推量される。私たちはここで、一つの足跡、それだけを注視するのではなく、普段の経験から、人の二足歩行や海水の動き、砂のもろいことなど、知識の広がりとその連関を足跡に考えているのである。しかし、自然を神の作品とする神学では、ついには神に至るような、知識の連続的な連なりは切られている。「神はその作り出したものによってだけ、私たちに知られる。そして神は宇宙における単一の存在であって、どんな種や類にも包含されることがない。種や類の属性があってはじめて、類比により、神の属性や性質へと推し量れるはずなのであるが」。「…ある原因が、これまでのすべての観察に現れた原因や対象とは、まったく対応せず類似もしてないほど、独特で個別の性質を持っている、などということがあり得るのか、私には大変疑わしい。対象として二つの種が、つねに連接していると分かるときにだけ、一方から他方を推測できる。だから、まったく単一のもので、どんな既知の種にも含まれないような結果を前にすることがあったとしたら、その原因に関して何か推測できるとはまったく思えない」(『人間知性研究』、第十一章、傍線ヒューム)

いま、机の上に何冊かの本があり、窓の外にはもみじの紅葉を見ている人達がいて、そのうち何人かは西洋人で

す。知り合いの鈴木さんの顔も見えます。このように、「本」「もみじ」「西洋人」「人」「鈴木さん」など、私に見えているものは、何かの種や類であつたり、種や類に属する個体として見えています。ここで、種や類は一般名詞、それに属する個体は固有名詞で表現されます。こうしてみると、神学の「神」は一般名詞でも固有名詞でもありません。「神」はどのように対象を指しているのでしょうか。斉一性の思想による創造物語の検討は、言葉を通して現れる人間の世界、その表現の限界を問うていると思われます。

ヒュームは、西洋で信仰のあり方が大きく変わる時代、その変化を担う一人でした。プロテスタントとカトリックの争い、教会と政治権力の結びつきなど、数百年にわたる血で血を洗う抗争と腐敗は、キリスト教をそのままにはしておきません。十七世紀には、聖書の真理を絶対としてその歴史性を否定する伝統に対し、批判が始まります。スピノザ（一六三二—一六七七）は、深い信仰のなから、『神学・政治論』（一六七〇）で、聖書の言葉を非時間的な真理とせず、その成立の歴史的経緯や作者の思想を探求しました。一方で十八世紀、フランスを中心とする啓蒙主義の運動、とくに百科全書派は聖書を含め、信仰を真正面から批判します。また英国では、ヒュームより百年ほど前から理神論が盛んとなり、神秘や奇跡を否定する知性的な宗教観は、その倫理学と信仰の調和からして、十八世紀には大きな影響力がありました。同様に、自然神学と呼ばれる、近代科学の進展を前にして、その成果をキリスト教信仰に取り込もうとしていた活動があり、この神学の出版物は十七世紀から十九世紀かけて、二百年以上にわたって、英国でもっともよく読まれる書物の一つとなっていました。

植物学者・博物学者であるジョン・レイ（一六二七—一七〇五）の『創造の御業に示された神の叡智』は、この神学の代表作です。ここでは、たとえば人の眼は、目的に適ったその精緻な作りで、神という作り手、つまり原因に、ふさわしい結果として描かれています。自然神学は強い信仰心に裏付けられ、当時の正確な科学知識を語る堅

実な活動です。しかしヒュームは、信仰を人の情念 (passion) とみて、理神論にも神学にも与しませんでした。ブリヤードで始まる『人間知性研究』の終わり、第十二章のしめくくりは、神学やスコラ形而上学の書物は、詭弁と幻想しか語らないのだから「火にくべてしまえ」(Commit it then to the flames.)。その穏やかさと暖かさで知られたヒュームの言葉がこれです。よく無神論者と言われるヒュームですが、しかしこの激しさは、その信仰への思いについて、何かを語っているのかも知れません。

## 六 右手・左手

ヒュームの因果性議論によって目が覚めたと言るのは、カント(一七二四—一八〇四)です。しかしカントは、ヒュームの議論に深く敬意を払いながらも、否定します。原因と結果の関係は知覚の連なりに一定の順序を与えて、この連なりを客観世界のできごとと判断させる。そのことで因果性は、私たちの知覚が単に主観的な表象ではなくて、対象世界の客観性に対応するための必然的条件となる。こうして、原因・結果の関係は、ヒュームが言うように経験から得られる知識ではなく、逆に、経験を客観的経験とする条件である。こう、カントは考えます。完璧を期すカントは、経験の可能性や主観と客観世界の関わりを探索していきながら、『純粹理性批判』(一七八一)という大仕掛けの大冊を著し、これは近代哲学最大の仕事となります。

ここでこの、仕掛けについては説明できませんが、この大著の一つの基礎となる議論を見ておきます。それは『空間における方位の区別の第一根拠について』(「方位論文」)(一七六八)という、長い題の短い論文にあります。この「方位論文」は難解で、『プロレゴメナ』(一七八三)と合わせて、その意義が見えてきたのは近頃のことです。

カントは「絶対空間というものがある」と言います。その証拠は、自分の右手と左手だ。空間は、人がいようがいまいが関係なく存在すると思われているが、これはちがう。右手と左手を見よ。ここには内的な差異は、何もない。にもかかわらず、右手と左手を同一の輪郭の中に入れることはできない。だから、私たちの見ている右手左手は、物そのものではなく、人の感性の直観による現象なのだ。右手左手だけでなく、すべて物はこのようにして、人間に、現象として現われている。

何を言いたいのか。人の手という例のささやかなことと、空間は人の感性的直観の形式で、それを通して、物はいかなる現象として現れるという『プロレゴメナ』の主張の大きさは、グロテスクにも思えます。

## 七 手袋の目方

『純粹理性批判』は空間論が先頭に立ちますが、そこで空間は「私の外」と言われます。さりげない言い方ですが、「空間」という語は「私」を含む、空間は私抜きでは意味を与えられないと示唆しています。右手左手の話は、私と世界を直観する形式である空間との関わりを示すためにあります。

右手左手は、どうして私と関係するのでしょうか。それは、「向き」、つまり「方位」です。右手と左手は、たとえば、指の並びでは同一です。親指のとなり人差し指、人差し指の隣に中指などと。いや同一ではない、右手では、親指の右隣が人差し指、左手では親指の左隣が人差し指と、違いがあるではないか。しかし、右左を持ち込む、この言い方は論点先取です。カントが方位の区別を言うとき、左右の区別の根拠を問うているからです。

そして、この区別は悟性、つまり人の考える力だけからは、出てこない。ここには直観という、感性の能力が必

要だと言うのです。そして「方位論文」では、議論が進むうちに、こんな言葉が出てきます。「もし、最初に創造された物が人の手だと思ってみると、それは必ず右手か左手である」。天地創造の空間、何もない、人もいない宇宙空間。そこに、人の手だけが一本、あります。私がこの空想をするとき、この手から、向きを、すなわち、右か左という方位を、決して度外視することはできません。この、左右という方位の区別は、私のいる場所、「ここ」あつての区別です。すると、一本の手しか存在しないと想定した宇宙空間にも、「ここ」があります。「ここ」とは私のいるところです。ということは、空（から）の宇宙に私があります。「私」は、こうして「空間」に不可欠となります。私と空間の、このような切り離せない関係、これを「直観」と呼んでもよいと思います。

これはよく理解されていませんが、カントの議論はラディカルです。右手左手が一つの輪郭へ、どうはまるかという言い方でもわかるとおり、カントは形を持つ物そのものを語っているのであつて、物の見え方ではありません。カントは、さまざまな物が私のいることから、左右の区別とともに見えている、という当たり前のことなど言っていない。そうではなく、生活空間であれ幾何空間であれ、対象に形がある以上、対象は私なしでは対象ではない。この飲み込みがたい洞察が『純粋理性批判』で姿を現す、カント観念論の基礎です。

『プロレゴメナ』は、『純粋理性批判』を短く切り詰めた本ですが、「方位論文」を論理的に整えた議論があります。第一章「純粋数学はなぜ可能か」の第十三節です。この節は、右手左手の議論をカント観念論全体のなかに位置づけます。そして「一方の手の手袋は、他方の手には使えない」。三つの長い注がついています。そこで、自分の理論は、数学によるアプリアリな、つまり経験に先立つ認識の現実への適用を保証し、現実の認識が仮象にすぎないとされることを防ぐ、「唯一」の手立てなのだとして強調します。あらゆる外的対象は必然的に幾何学の命題に合致せねばならない。幾何学の空間は感性的直観の形式であつて、私たちはこの形式を、自分のうちにアプリアリに見い

だす、などといった文は『純粹理性批判』のカタログを見せられる気がします。カントが手袋の議論にかけた目方の重さが分かります。

## 八 射影幾何学へ

ヒュームは二つのボールの動きに目をこらしました。カントはさらに身近な二つの手を見つめます。そして、ネジ、旋毛、そら豆、蛇、太陽と月の運動など、「方位論文」はおびただしい例を挙げながら、物の形を考えます。ヒュームやカントにとって、身近で見慣れた光景が哲学への入り口です。しかし、手ぶらで始めるといふわけではありません。時代背景が、ここに明確に現れています。

ヒュームが哲学の伝統だけでなく、当時の自然科学、神学などから、その探究の動機と方法を得ていることを見ました。一方、「方位論文」は新しい幾何学に囲まれています。

私たちが学校で習ったユークリッド幾何が主眼とするのは、図形の計量的性格（長さや面積、体積、その等しさや加算・分割など）です。三平方の定理が典型です。しかし幾何学は十七世紀、この計量から離れ始めます。ルネサンスの時代、ユークリッド幾何学をもとにして、絵画の透視図法が完成されました。透視図法は一つの視点から見る対象の形を二次元に描く技法です。この図法の平面上では平行線が交わります。デザルグ（一五九一—一六六二）は、このような交点、つまり無限遠点を取り込んだ幾何学を作りました。その方法を継ぐパスカル（一六二三—一六六二）の「円錐曲線試論」（一六四〇）は、古代ギリシャのアポロニウスによる円錐曲線論の新たな展開ですが、ライブニッツを促して、計量を介さず、形を直に扱う幾何学を構想させました。カントは「方位論文」で、ライブニッツを自

分の論文の動機として名指しています。こうして「手袋」は、幾何学が近代へと進展していく道に置かれることになります。

この一連の動きは射影幾何学につながります。この幾何学は平行線が無限遠点で交わる空間を前提します。平行線は同じ方向を持つ直線群で、同一の無限遠点で交わります。すると、この空間では無限遠点を通して直線の方向が表現されることになります。ユークリッドでは空間の方位は主題化されていません。一方、射影空間の対象は明示的 (explicit) に、方向を持つ、つまり方位のなかにあると言えます。射影幾何学は量から自由であることで、古典幾何学ではもつとも包括的になり、この包括性によって現代数学への一つの通路となります。こうしてカントは、ユークリッドから現代幾何への変化のなかで、物の形、空間の方位性を、「私」の問いと関係づけたのです。ここで世界は方位空間であることで、私と切り離せない関係を持つことになります。

ヒュームは因果性を、世界の客観的な性質ではなく、「人」が世界について持つ思想として描きましたが、カントでは、空間に方位を与えている「私」が現れます。人から私へと、ここで議論は先鋭化しています。

何もない、しかし「ここ」のそなわった宇宙空間、このようなところからどうして、私が他人とともに生きる社会を基礎付けるのか。『純粹理性批判』を仕上げた後のカントの関心は、道德の基礎付けでした。そして道德の先には宗教が考えられ、神は最高の根源的な善、そのような知性そのものと言われることになります。

ヒュームとカントは、西洋の信仰生活の曲がり角に立っていました。その哲学には信仰への問いがみなぎっていますが、宗教の基礎に、一方は情念、他方は理性を考えます。二人の宗教観のこのような分裂に、時代が映されているようです。

## 九 あのカラスの音がする

ヒュームやカントとほぼ同時代の元禄期に、盤珪永琢（一六二二—一六九三）が活躍していました。盤珪は当時、一世を風靡した語り手で、その説法には千人を超える人々が集まることもあったと言われています。

拙僧が何れもへ申聞せまする説法は、別の事でもござらぬ不生の断でござる。人々佛心そなわりてござれども、それを御存知なき所を、拙僧が申聞せまするでござる。されば佛心有とはいかやうなる事ぞと申に、此御屋敷の面々、拙僧が申事を聞しめされんとおぼしめして、何れも御宿より覚悟なされ御越あつて、説ほう聴聞の内に、此寺の外にて犬が鳴ますれば犬の声と聞しり、からすが鳴ば、鳥の声としり、大人の声を大人としり、子供の声をば子供としりたまふ。…前廉より覚悟なくては、いかでか物の声も、色香をも、此会座にてしらつしやろうやうはなけれども、其覚悟なき事を、見しり聞しり致す所が面々にそなはりたる不生の氣と申ものでござる。…見ようの、聞ふのと、まへ方より覚悟なく、見たり聞たりいたすが、不生でござる。見よう聞ふと存る、氣の生じませぬか、是不生でござる。不生ならば不滅でござる。不滅とはめつせぬでござるなれば、生ぜざる物、滅すべきやうはござらぬ。爰が面々の佛心そなはりたる所でござる。されば佛菩薩の世より今の入界に至るまで、佛心と申ものは、不生不滅でござるによつて、面々の名に、此佛心そなはりて有ではござらぬか。其佛心有事をござるなきにより、何れもが迷はつしやるでござるぞ。〔盤珪禪師語録〕「盤珪佛智弘濟禪師御示聞書」下



盤珪はこの説法を、元禄三年（一六九〇）夏、四国の丸亀で行っています。盤珪の説法の主題は多岐にわたりますが、繰り返し現れる鳥の声の説法は、中心的なものと見られます。

すでに切り詰められた説法ですが、さらに切り詰めれば、「皆さんは仏心をお持ちです。その証拠には、いま、私が説法しているとき、皆さんは聞こうと思わなくとも、寺の外になく犬の声、鳥の声を、それぞれ犬の声、鳥の声として聞き知っています。見よう、聞こうなどと、意図しないで見たり聞いたりするのが不生です。見よう、聞こうという気持ちが生じていないのに、見知り、聞き知ることが不生です。不生ならば不滅です。これが皆さんに不生不滅の仏心が備わっているということなのです」。

極端に簡潔ですが、仏教の教義に親しんだ聴衆には、これで十分だったでしょう。当時の出版物や、あるいは儒学国学においても、人々の仏教教養の分厚さがうかがえます。盤珪の説法は不生禪とも呼ばれます。しかし盤珪は、自分の説法が仏法や禪からも離れた、独自のものであることを強調しています。

惣じて身どもは佛語祖語を引て、人に示しませぬ。只人々の身の上のひはんですむ事でござれば、すむに、又佛祖の語をひかうようもござらぬ。身どもは佛法もいはず、又禪法もいはず、説ふやうも御座らぬわひの。みな人々今日の身の上の批判で相すんで、埒の明事なれば、佛法も禪法も、とかふやうもござらぬわひの。  
（同書上）

不生不滅といふ事は、むかしから、経録にも、あそこここにも出てござれども、不生の証拠がござらぬ。…身どもが初て証拠を、説だしましたわひの。（同書上）

説法は「不生」をめづつていて、これは、何かを見ているとき、見ようという「氣」は生じず、その意図も生じていないと言う意味です。説法のさまざまな話題はこのささやかな事実に通じています。「みな人々今日の身の上の批判で相すんで、埒の明事なれば、佛法も禅法も、とかふやうもござらぬわひの」。皆さん、自分の身の回りを振り返ってみなさい、するといま、からの声が聞こうとしなくても聞こえている。これが不生不滅の証拠であることをよく思い知りなさい。「あのカラスの声がする」のであつて「私がカラスの声を聞く」のではない。これを納得するだけで埒があくので、仏法も禅法も説きようがありません。

この説法をはじめて目にしたとき、昔、外国にいたときですが、その即物的で時代を問わない表現に打たれました。哲学の長々と続く議論も、仏教の実践と教えの身についた聞き手の前では、このような表現ができるのでしよう。信仰心が大きく形を変えつつある時代、ヒュームやカントは「魂」の永続を問いながら、その実体であることを否定しました。盤珪に、国や文化の違いを超えた、魂の不滅をめぐる同時代の問いをみることができます。

### おわりに

文献学の方法に対して、哲学のやり方はどうなのか。ヒュームとカントを通して考えてみました。この生活の場が、ヒュームやカントが読み抜くべき文献であり資料でした。その、万人に親しい経験を問うことからくる開かれた表現は、ソクラテスなど、ギリシャからの流れをくむ哲学の典型です。プラトンはいつも対話形式で書きました。そして哲学はその時代を詳細に記した碑文のように、人々の思索や希望、そして信仰の跡をとどめています。

子供に「数を数えられるだけ続けてごらん」と言えば、「一、二、三」と始めてしばらくすると飽きて、「ずっと

続く」と言うでしょう。「ずっと」とは、気にもとめない日常語ですが、無限や斉一を表します。人は子供でも無限を表現します。「ずっと」という、ありふれた、しかしもう別の言葉にならず分析を拒む言葉は、生活の基礎にあつて、人が人である表現とも言えます。ヒュームが日常語で哲学を語り、平俗な光景から離れないのは、ここに哲学の核心があるからです。

カント観念論の基礎は空間の「ここ」でした。「ずっと」「ここ」「あの」「つぎ」「いない」「よい」「わるい」、…子供も話すこのような言葉は、人の生きる条件を表現しながら、地に根を張ったように見えます。長い年月をかけて作られてきた哲学用語も、このような言葉の横ではガラス細工のように見えます。しかし人は、ガラスで自分の足下を探る営みをやめることはないでしょう。

私にとって、佛教大学に勤めることは、仏教の存在、共感する心を身近に感じることでした。卒論ゼミの学生さんにはよく、福祉の仕事、特別支援教育を目指す人たちがいました。卒論で忙しいときも、大学近くの支援活動に出かけます。それを言うこともせず、理想を口にするかもしれない学生さんの姿には、頭が下がります。遅々とした歩みの私の考え事は、佛教大学なくして、決して続けることはできなかったでしょう。退職いたしますが、今後とも感化を与えていただけることを願っております。

以上です。ありがとうございます。

## 補足 一

哲学の議論が歴史と関わる、そのありさまをもう少し見ておきたいと思います。

ヒュームのいたエディンバラの社交界に、ジェイムズ・ハットン（一七二六—一七九七）もよく顔を出していました。地質学の創始者と言われるスコットランド人です。この頃、地層の発見と言われるできごとがありました。これにハットンが関係します。奇妙に思われますが、地層が、長い時間をかけた、気象や地殻変動といった地球の活動の結果であるとは、明確には考えられてこなかったのです。なぜなら、神による地球の創造によって、生き物すべてを含めて、ほぼ今の地球のような姿で、できあがっていたからです。地球の年齢は当時、聖書などに基づいて、約六千年とされ、地球の変化そのものはまだ興味を持たれていませんでした（十七世紀のニコラウス・ステノ〔一六三八—一六八六〕を先駆者として、地質学への動きは少しずつ始まっていました）。ハットンは地層に千年単位とは桁違いの長い時間を考え、その生成の様子が、積み重なるいくつもの層に表現されると考えました。

ハットンを引き継ぎ、世界初の地質学テキスト『地質学原理』（一八三〇）を著わしたのが、スコットランド生まれのチャールズ・ライエル（一七九七—一八七五）です。ライエルの弟子であり友人、チャールズ・ダーウィン（一八〇九—一八八二）が、進化論発見のきっかけとなった長い船旅に、『地質学原理』を手にして出発したのは一八三一年でした。ライエルやダーウィンの時代、まだ多くの人が、神による天地創造を事実としていました。ライエルはこの強い思想に対して、「今と同様の過去の自然法則」、「考えられないほどの長い時間をかけた、連続性を持った変化」といった、地球生成をめぐる自然法則の基礎を明言したのです。

この法則からは「現在と連続性を欠くようなできごと」、すなわち、創造のような断絶が外されています。この原理がダーウィンの進化論に通じていることは、よく分かります。当時、天変地異説に対して、ライエルの説は斉一説と称されることもありました。この、私たちにとつての地球生成や進化の常識は、ようやく十九世紀の半ばくらいから末にかけて、一般に定着し始めました。ここに当時の自然観、宗教観の大きな変革と、ヒュームの斉一性

議論や宗教論とが、呼応するようすを見ることができません。

『地質学原理』は当時の英国の教会勢力を刺激せずに、保守的な知識人にも読んでもらえるよう、注意をはらいながら出版されました。そしてよく読まれました。ここでライエルは宇宙における人間の「はかない存在」を、旅人 (sojourners) に例えて語っています (第一巻第九章)。『創世記』が、神によって特別に創造され、世界の中心のような人間を語ると真逆です。ライエルの地質学は地球生成の歴史を語りますが、このような新たな人間観でもありました。

## 補足 二

盤珪の説法について、魂の実体性をめぐる普遍的な問いをみることができます。

カントは空間を、端的に「私の外」と表現していました。そして、私の内側にある、実体としての心といった考えは退けてしまいます。しかし、こうなると、私が私であること、私がずっと同じこの私であること、このことは、どう説明できるのでしょうか。私の内なる心という、不変の実体がなければ、私の同一性に、どう意味を与えればよいのか。この、私の (時間を通じての) 同一性という問いは、自我をめぐる哲学の議論の一つの核心です。キリスト教神学が、もっとも力を入れた議論の一つが、魂の不死、すなわち、魂の (永遠の) 同一性でした。

カントはこの問いに対して、私が、私の外にある対象、つまり空間中の一つの対象を「何か変わらないもの」として知覚することと、私の変わらなさは同一だと論じます。この議論によって、私が直に知ることの出来るもの、確実なものは、まず私の内なる心だという、デカルト的な観念論を反駁します。『純粹理性批判』の「観念論駁論」

と呼ばれているところです。たとえば、私が前に立つ一本の木を見ると、この木は「何か変わらないもの」と見えていて、この木の姿が、「私はずっと同じ私だ」という自我意識です。まず直接的なのは私の外の対象についての経験であつて、この経験によつてはじめて、内的経験が可能になります。

聴衆は盤珪に、カラスの音がすると言われて思わず、外に聞こえている声が聞こえます。そのとき、カラスの声はただ、カラスの声として聞こえてはいません。「あのカラスの声」です。「あの」とは「いつもの」「前、聞いたことがある」ということです。私たちが見たり聞いたりする物や音は、みな、「前に見たことのある、前、聞いたことのある」物や音です。ヒュームは「私たちの住む世界が、見慣れた親しい物事がなだらかに連なる場所であること」を、斉一性という思想で語っていました。この世界のなだらかさは、私の同一性です。

「あのカラスの声」が聞こえるとき、かつてカラスを聞いていた自分、昔の自分がいます。「あの」という親しさは、時間の幅であり、かつての自分といまの自分が、カラスの声のなかでつながっています。私の同一性は不変の実体である心によつて保たれるものではありません。

盤珪は「不生」を言い換えて、「見ようとか、聞こうということとは、カラスの音が聞こえるときなどに、生じていない」と言っていました。カラスの音が聞こえる以前には、私の同一性は、つまり、私は、ないからです。聴衆は「空」について、教養を持っていたでしょうが、盤珪という人格が目前に広げる空の光景は新鮮だったに違いありません。

## 付記

この原稿は、二〇二一年一月二十七日の、仏教学部、最終講義に手を加えたものである。なるべく当日の流れと内容に沿うように努めた。三十分に短縮した講義であったので、ここでは歴史的な事を詳しく、説明を明確にするように、文章を補った。出典はこの原稿の性質上、文章のなかに書き込み、注は省いた。